活動中心の授業にするための評点方法の改革

中西 毅（なかにし・たけし　和歌山・県立和歌山工業高等学校）

〈メッセージ〉 チャップリンの『独裁者』のスピーチを教材に使っています。人間の本性は「助け合い」なのか，それとも "live by each other's misery" なのか。"natural man" とは，どのような生き方をする人間なのか。生徒たちと深めたいと思っています。

1．はじめに

最近，官制研修や高英研の研修などに参加すると，全国各地の「授業達人」の方を講師に招いた「帯活動」「ペアワーク」「リテリング」など，生徒が英語を使って活発に活動する授業形態満載のワークショップ的研修ばかりです。研修を受けた後，「自分もできる！」とその気になって授業に取り入れてみても，なかなかうまくはいきません。

その理由には二つあると思います。一つは日本人同士が英語でやりとりをする必然性のなさです。よっぽど英語学習に意欲がある生徒でなければ，本当に聞きたい内容は，母語で情報交換しようとするのは当たり前です。初めは物珍しく食いついてきますが，ただの「会話ごっこ」を英語でやっても，すぐに飽きます。もう一つは，その活動が評点に結びついていないことです。特に高校卒業後の進路実現に英語が必要ない生徒が多い高校では，「こんな活動やって何になるんよ？」というのが大方の生徒の空気です。授業達人たちのように，生徒をひきつける魅力も迫力を持っていない僕には，何の武器もなしに，生徒たちと活動中心の授業をすることは不可能です。しかし，一方的な講義式の授業では，生徒たちは授業に参加してこないし…。そこで僕が目をつけたのは，彼らにとって学習の最大の外的動機づけである「赤点をとって留年しないこと」を餌にすることでした。

2．必修タスク＋定期テストの点数＋ボーナス

学期の初めに，僕は必ず，その学期の評点方法を生徒に明示します。以下は，２年生向けの「２学期前半の成績の付け方」です。

２学期前半の成績の付け方
1　必修タスク 30 点
　（1）アレントーク１回
　　（ものトーク，ひとトーク）
　（2）大きなカブ　リズム読みテスト合格
　（3）大きなカブ　暗記テスト合格
　（4）大きなカブ　写し８回
　（5）大きなカブ　和訳プリント８枚
　（5）夏休みの宿題を 20 ページまでやる
2　中間テスト　50 点
3　ボーナスポイント　　基本無制限

アレントークとは，FLT（外国語指導講師）のアレン先生とトークする活動のことです。「大きなカブ」とは，元岐阜大学教授寺島隆吉氏と研究仲間が編み出してきた寺島メソッドにおける「基本三教材」の一つで，ロシア民話「大きなカブ」の英文の教材です。

授業中は，講義式一斉授業スタイルではなく，締め切りまでにすべてのタスクを達成すべく，生徒たちが自分たちで計画して自分たちのペースで学習に取り組む「寺子屋スタイル」を採用しています。もちろん，プリントなどできるものは家庭でやってきてもかまいません。

表のとおり，その学期内にすべきタスクをすべてこなせば，赤点突破点である 30 点を保障しています。それから，テストの点数が 50 点，残りはボーナスポイントとなります。必修箇所以外の暗記，英文の読み物の和訳プリント，洋楽の名曲のさびの暗記など，必修タスクが早く終わって余力のある生徒がチャレンジするタスクを用意し，それを突破すればボーナスポイントを与える制度にしています。

この方式に対して「普通の授業をしてほしい」「テストの配点が低すぎる」「全部自分でやらないといけないのでめんどくさい」という声もあります。でも，多くの生徒は，「やったことがそのまま点数に加点されるので意欲が上がる」「家でも学習するようになった」「英語をやろうと思った，今までは英語をあきらめていた」など，この評価方法に好感をもって学習に取り組めているようです。

〈必修タスク「リズム読み」に取り組む生徒たち〉

学校英語教育においては，Can-Do リストに代表される目標や到達度を明確化した教育活動（いわゆる目標準拠評価）が主流となっています。今の評点方法にしてから，僕は，その流れに注意すべき点が２点あることに気づきました。

まず，目標のレベル設定についてです。目の前の生徒をよく観察し，集団の最後尾にいる生徒でも，「難しそうだけれどがんばればできそうだ」と思える目標を設定すべきです。生徒の意欲や持っている力を無視して一方的に目標を与えても生徒の意欲は上がらないでしょう。さらに，全員が突破するまで責任を持って支援して初めて，目標設定者が責任を果たしたことになると思います。勝手に決めた目標の上から生徒を見下ろして「ここまでおいで」をするだけの教員には絶対になりたくないです。

２点目は，目標を達成し終わった生徒に対するケアです。目標を達成した生徒をそのままにしておかないで，彼らの学習意欲を持続できるような「ボーナス課題」を用意しておかないと，fast learners たちの学びの歩みは止まってしまいます。そして，いずれは「ボーナスポイント」という見返りなど関係なしに，ただ好きだから学習を続けられる生涯学習者の育成までを見越すこと。

「目標を立てたらそれで終わり」ではなく，「全員が突破するまで責任をもつこと」「早く突破した生徒への働きかけを忘れないこと」この二つがないと，目標準拠評価はただの「できる生徒とできない生徒を選別するものさし」「勉強とは，ゴールがあり，到着すれば終わるものだという刻印づけ」にしかならないでしょう。

3．生徒の活動を励ます評点はどうあるべきか

「ほかの教科の授業は,授業中にバーって先生が説明するだけ。クラスで1〜2名の勉強のできる子は先生の話を聞いて何が大事かしっかりノートをとって,授業中も覚えるし,テスト前,何を勉強するかわかってるからいい点数とれるけど,僕とか大部分の子たちは,普段の授業はボーっと聞いてるだけで何が大事かもわかれへんし,何も覚えへん。ほんで，テスト前になって何を勉強するかわからんくってあせりまくる。で,そうやって覚えたことはすぐ忘れる。先生の授業やったら,写したり,暗記したり,和訳したりするから,授業の中で覚えられる。ほんで,完走したら 30 点くれるっていうシステムやからせなしゃあない。テスト前だけ勉強するんちごて,授業中もしっかり勉強できるから忘れへん」

ある卒業生が僕に伝えてくれた語りです。彼の語りは,生徒にとって最大の関心事である「30 点」という餌を武器にした姑息な手段での「活動型授業」ではありますが,「講義式の一斉授業」や,「学期の最後に一回だけ実施される定期テストが成績をつける際の大きな材料になっているシステム」よりも，僕が今やっている方式の方が生徒の学習意欲を深め,定着にもつながるんだという自信をくれました。「学びの基礎」は,「基礎学力」ではなく,「学習意欲」。これからもあの手この手で生徒の学習意欲を高める工夫を模索し続けたいと思います。

<参考文献>
寺島隆吉(2002)『英語にとって「評価」とは何か？』あすなろ社
寺島隆吉・寺島美紀子(2018)『これですべてがわかる―魔法の英語３教材』あすなろ社
山田昇司(2016、監修・寺島隆吉)『寺島メソッド 英語アクティブラーニング』明石書店